

令和 5 年 2 月 22 日

教 育 長 様

研究コース	
A グループ研究 A	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
571190	
選定番号	112

代表者 校園名： 大阪市立池島小学校
 校園長名： 小山勝一
 電 話： 06-6571-4354
 事務職員名： 松尾隆子
 申請者 校園名： 大阪市立池島小学校
 職名・名前： 主務教諭 倉持依理佳
 電 話： 06-6571-4354

令和 4 年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和 4 年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究 A	研究年数	新規研究（1年目）
2	研究テーマ		「活用する力」をつける 説明文読解の授業 - ルーブリックを取り入れた授業実践を通して -		
3	研究目的		本校には、読解力・言語力に課題を抱える児童が多くいる。全校で取り組んでいる「読書タイム」でも、量の多い文章に抵抗感があるため絵の多い本や漫画ばかり読んでいたり、語彙が少ないために学習面や生活面で自分の考えや思いをうまく表現できなかったりする。 大阪市教育振興基本計画の「基本的な方向 4」に述べられているように、読解力の育成には、主語・述語や文脈を追い文意を理解する力を体系的に養うことが必要である。また、児童の基礎学力の定着及び活用力を育成するために、国語科において、多読・速読など言語活動の充実化から児童の語彙の増加を進める必要がある。実用的な文章を「正しく読む」指導を通して、文理融合的な内容を含む「総合的読解力」の育成につながるといえる。これらの資質・能力の育成を通じて、児童が正しく読み解き、自分の考えや思いを相手に正しく伝えられる表現方法を理解し、自身の「伝える力」へと活用できる転移する学力を身に付けられるような指導を目指す。		
4	取り組んだ 研究内容		いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。 (MS オシック 9.5 ポイント) 説明文読解の研究授業を下記の内容日程で実施した。すべてに和歌山信愛大学小林康弘教授に指導講評をいただいた。研究としては、ルーブリックを設定し児童と教員が学習目標を共有することで学びの方向性を提示した。単元後半にはパフォーマンス課題を作成することにより、説明文を通して学んだ主張の仕方、読み手を意識した文章構成、表現の工夫を活かしたパフォーマンスができるようにした。指導案は、目標・評価規準・パフォーマンス課題・ルーブリックを関連させて書けるように工夫した。以下が「単元名」とパフォーマンス課題である。 9月7日 2年生「どうぶつの ひみつをさぐろう」 そうだったのか！どうぶつのひみつクイズ 10月7日 6年生「町の未来を描こう」 めざす未来の池島の姿（プレゼンテーション） 11月4日 5年生「和の文化について調べよう」 和の文化について（プレゼンテーション） 12月9日 4年生「くらしの中の和と洋について調べよう」 どちらもいいね！身の回りの和と洋紹介文 1月27日 1年生「くらべて よもう」 「どうぶつの ちえずかん」 ルーブリックによって児童はめざすべきパフォーマンス課題が具体的にイメージすることができ、説明文で学習した表現方法を活用する力が伸びている。6年生の実践時には区の教育担当次長を招き、港区の池島地域の未来の姿を見ていただくことができた。「区の教育行政会議でも発表してほしいですね。」という次長からの評価をいただき、児童は達成感を味わうことができていた。 説明文の内容や著者の表現の工夫を学習する際には、音読黙読に多くの時間を費やし、児童は文章に込められている意味理解を深めることができていた。パフォーマンス課題を作成するにあたり、指導者は多くの関連図書を図書室や市立図書館から準備し、教室に配置していた。児童は学習と並行しながら図書を調べることができており、多くの図書を読む機会となった。また、2, 5, 6年生は Google スライドでクイズやプレゼンテーションスライドを作成することができ、様々な情報をウェブサイトから得ることができていた。 指導者は、目標と評価の一体化を図ることができるようになり、より深い教材解釈ができるようになつた。また、C評価になるであろう児童への事前の手立てを見通すことができ、ワークシートやヒントカードなどで学びを成就できる支援がしやすくなつた。		

5 研究発表等 の日程・ 場所・ 参加者数		研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。						
		日程	令和 5 年 1 月 27 日	参加者数	約 3 名			
		場所	大阪市立池島小学校					
		備考	6名参加予定であったが当日3名から欠席連絡があった。					
6 成果・課題		大阪市教育振興基本計画に示されている、 <u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u> および <u>教員の資質や指導力の向上</u> について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。						
		<p>【見込まれる成果 1】 国語科の教材文の読み取り、図書活動の充実等により語彙数の増加を図り、言語力の基礎的な素養を高める。</p>						
		<p>《検証方法》 学力経年調査の各教科における「基礎」に関する領域の平均正答率を、4・5・6年生において経年的に比較し、前年度より4ポイント上昇させる。（令和3年度各教科「基礎」領域の平均正答率3年65.9 4年63.2 5年64.3）</p>						
		<p>〔検証結果と考察〕 学力経年調査の各教科における「基礎」に関する領域の平均正答率は下記の通り。 現4年65.9⇒65.6 現5年63.2⇒66.7 現6年64.3⇒65.8 前年度より4ポイント上昇までは到達しなかったが、5、6年生での伸びは認められる。国語の研究を進めてきたので、国語の正答率は4年66.1 5年生74.3 6年生70.3と他の教科よりも高い。じっくり文章を読み込むという学びが定着してきていると考えられる。</p>						
		<p>【見込まれる成果 2】 国語科説明的文章を教材として、ルーブリックを活用する授業に取り組むことによって、他教科等においても見通しをもって学ぶ力とともに児童の活用する力を伸ばす。</p>						
		<p>《検証方法》 学力経年調査の各教科における「活用」に関する領域の平均正答率を、4・5・6年生において経年的に比較し、前年度より4ポイント上昇させる。（令和3年度各教科「活用」領域の平均正答率3年37.7 4年58.5 5年45.5）</p>						
		<p>〔検証結果と考察〕 学力経年調査の各教科における「活用」に関する領域の平均正答率は下記の通り。 現4年生37.7⇒34.6 現5年58.5⇒66.7 現6年生45.5⇒65.1 ここでも、5、6年生が伸びている。ルーブリックを児童と共有する効果的な学年状況であったのではないかとも考えられる。国語の正答率は4年42.7 5年51.6 6年60.0とやはり他教科の正答率よりも高い。ここにも国語の研究成果が表れている。</p>						
		<p>【見込まれる成果 3】 ルーブリック、パフォーマンス評価に関する研究を深め、国語科の教材研究を深めた授業を行うことにより、児童が国語の見方・考え方を働かせながら思考しようとする態度を育成する。</p>						
		<p>《検証方法》 校内調査の「授業は工夫されていてわかりやすい」と回答する児童の割合を85%以上にする。</p>						
		<p>〔検証結果と考察〕 校内調査の「授業は工夫されていてわかりやすい」と回答する児童の割合は下記の通り。 10月 第1回調査 87% 1月 第2回調査 82% 授業にUDの考えを取り入れ、特別支援学級の児童も同じ単元を共に学べるように工夫した。ルーブリックを指導者と児童が共有できるように工夫したが、学習目標が難しくなってきたところに数値の下がった要因があるのではないかと考えられる。</p>						

研究コース

A グループ研究A

選定番号

112

代表校園

大阪市立池島小学校

校園長名

小山勝一

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p>《検証方法》</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>【見込まれる成果5】</p> <p>《検証方法》</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>【研究全体を通した成果と課題】 具体的に記載してください。 成果として、児童の視点からは、以下の3点があげられる。 ・「何のために学習するのか」見通しをもって学習に取り組めることで、意欲の向上がはかれた。 ・学習したことすぐにパフォーマンス課題で使うことで、活用の力をつけることができた。 ・学習の振り返りがしやすくなった。 指導者の視点からは、 ・指導と評価の一体化を図ることができた。 ・どこまでできるようになってほしいかを具体的に思い描くことで、C評価に陥りやすい児童への手立てを準備し、実行できた。 ・指導の振り返りがしやすくなった。 今後の課題としては、パフォーマンス課題やループリックが適切なものであるか、引き続き精査していく必要がある。</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>すべての研究授業の成果として、児童が説明的文章の内容を着実に読み取れるようになっている。さらに、パフォーマンス課題を明確にし、ループリックを児童と共有したことにより、パフォーマンス課題の質が高いものになった。高学年児童が作成したプレゼンテーション用のスライド、低学年の発表カードなどは資料図書をよく読み込み、活用することができている。和歌山信愛大学の小林教授からは、毎回国語科の見方・考え方を働かせた授業つくりや評価、発問に至るまでていねいな指導をいただくことができた。国語科の研究では最先端を進んでおられる先生の指導を受ける機会を得られたことは、教員の日々の指導力向上につながるものと考える。引き続き、研究を深めていきたい。</p>
---	-------	---